

国別動向

欧米諸国

◇ 英国

景気は着実に回復

最近の英国経済は、堅調な個人消費に設備投資、輸出の持直しも加わって「次第に明るさを増してきている」（英蘭銀行）。

すなわち、実質GDP（要素価格・産出ベース、季節調整済み）は、第2四半期に前期比（注）横ばいと一時伸び悩んだが、第3四半期には+1.2%とかなりの増加を示した。これは個人消費が増加基調（第2四半期+1.6%→第3四半期+0.9%）を維持しているうえ、設備投資（同 Δ 2.6%→+1.3%〈住宅投資を含む〉）、輸出（同 Δ 1.4%→0.4%〈サービスを含む〉）が上向きに転じたことによる。

（注）以下、増減（ Δ ）率、騰落（ Δ ）率は特に断らない限り前月（期）比（季節調整済み）。

最近の主要経済指標をみると鉱工業生産は第2四半期に Δ 0.2%と停滞したが、夏場以降原油生産や家電製品等消費財を中心に持直してきており（7～10月平均の4～6月平均比+0.9%）、先行きについても「輸出受注の増加もあって緩やかながら増加をたどろう」（英国経団連）とみる向きが多い。

小売売上数量は夏場に一服心配がうかがわれたが、秋口以降再び順調に増加（9～11月の対6～8月比+2.4%）している。こうした状況下、今後の個人消費については「すでに貯蓄率が低水準（第3四半期の8.5%は73年第1四半期〈8.1%〉以来の低さ）にあることなどから83年前半のような力強さは期待しえないとしても、増加基調そのものは維持されよう」（英国政府）との見方が一般的である。また製造業の設備投資は、第2四半期に4年振りの増加となったあと、第3四半期はさらに拡大を

みている（第2四半期+1.6%→第3四半期+2.4%）。さらに先行きについても、稼働率の上昇や企業収益の改善（第2四半期+0.4%→第3四半期+13.7%）等を背景に一段と増勢を強めていこうとみる向きが大勢で、事実、産業貿易省の調査（83年12月）によっても84年の製造業設備投資は前年比+8.8%と見込まれている。

この間、輸出（数量）もこのところ米国向け中心に持直し気配がみられ（8～10月平均の5～7月平均比+3.4%）、今後設備投資とともに個人消費に代わる景気回復の先導役になるのではないかの期待が広がりつつある。

こうした状況下雇用面をみると、失業者数が10、11月とわずかながら減少をみており（9月295.3万人→11月293.7万人）、これまでの悪化傾向によりやく歯止めがかかりつつある。もっとも景気回復テンポが緩やかなことから、今後雇用情勢が急速に改善に向かうとみる向きは少ない。

物価は落ち着き基調

秋口以降の物価動向をみると、小売物価（原計数）は季節野菜の高騰にもかかわらず、交通費、光熱費等の落ち着きもあって比較的小幅な上昇にとどまった（9～11月各+0.4%）。他方生産者物価（原計数）は食料品の急騰を背景に前月比では夏場までに比べやや高目の上昇が続いたが（9月+0.6%、10月+0.4%、11月+0.4%）、前年同月比ではなお落ち着いている（前年同月比〈11月〉+5.6%）。

こうした状況下、先行きについても「8月から始まった84年度の賃金改訂交渉もこれまでのところおおむね前年を下回る賃上げ率で妥結をみていることを勘案すれば、今後も物価は落ち着き基調を維持しよう」（英蘭銀行）との見方が多い。

この間最近の貿易収支は、月によって振れがあるものならしてみればなお赤字基調を続けている（7～9月平均 Δ 1.0億ポンド→10～11月平均 Δ 1.6億ポンド）。これは輸出がようやく上向き（10～11月平均の対7～9月平均比+5.1%）はじめた反面、輸入がかなりの増勢（同+6.3%）をみているためである。こうしたことから、83年の経常収

支は、前年を大幅に下回る黒字にとどまるものと見込まれている(83年1~11月の累積経常収支+13.1億ポンド、前年同期+45.1億ポンド)。

ポンド建M₃の増加率は目標レンジ内に収束

9月以降のマネーサプライの動きをみると、ポンド建M₃は企業需資の着きや国債の非銀行部門における消化進捗を背景に鈍化傾向にあり、基準時(83年2月)比年率も9月+9.5%、10月+10.7%、11月+10.3%と目標(+7~11%)圏内で推移している(8月同+12.1%)。こうした状況下、英蘭銀行は6月以降据置いてきた市場介入金利を10月上旬引下げた(10月3日、14日物レート9.5625%→9.0625%)が、その後はポンド相場の軟調地合が続いたこともあって一段引下げを見送っている。

一方財政面では政府が11月17日、84年度公共支

出計画を発表したが、その内容は支出総額を実質ベースで前年度計画比+0.5%程度にとどめるという緊縮的なものとなっている。

この間10月から年末にかけての金利動向をみると、短期金利は10月初の英蘭銀行市場介入金利の引下げ等を背景に11月央まで緩やかに低下した後、年末にかけてはおおむね横ばい裡に推移した(TB<3ヵ月>入札レート、9月末8.97%→11月11日8.81%→12月末8.84%)。一方長期金利は、83年度の公共部門借入需要の大幅増加予想(政府では当初計画<82億ポンド>比20億ポンド程度上振れると見込んでいる)を背景に10月中上昇をみたが、11月に入り政府の抑制的な公共支出計画の発表を好感して一転低下した(コンソル国債<2.5%もの>9月末9.99%→10月末10.07%→11月末9.86

英国の主要経済指標

	1981年	1982年	1983年					
			第2 四半期	第3 四半期	8月	9月	10月	11月
産業総合生産指数* (1980年=100)	96.1 (△ 3.9)	98.1 (2.1)	99.4 (1.1)	100.3 (1.6)	100.2 (1.5)	100.9 (1.7)	100.4p (1.9)	
小売売上数量指数* (1978年=100)	105.5 (1.2)	108.2 (2.6)	113.6 (6.4)	114.7 (5.3)	112.8 (3.1)	117.3 (7.3)	115.2 (5.4)	116.5p (5.9)
○失業率* (%)	10.0 (6.4)	11.7 (10.0)	12.5 (11.5)	12.4 (11.9)	12.3 (11.9)	12.4 (12.0)	12.3 (12.1)	12.3 (12.2)
平均賃金収入* (1980年1月=100)	125.8 (12.9)	137.6 (9.4)	147.9 (8.4)	150.4 (8.2)	150.2 (8.4)	150.7 (8.5)	152.0 (8.7)	
小売物価指数 (1974年1月=100)	295.0 (11.9)	320.4 (8.6)	333.7 (3.8)	338.0 (4.6)	338.0 (4.6)	339.5 (5.1)	340.7 (5.0)	341.9 (4.8)
生産者物価指数 (1980年=100)	109.5 (9.5)	118.0 (7.8)	124.2 (5.7)	125.1 (5.4)	124.9 (5.4)	125.7 (5.4)	126.2 (5.4)	126.7 (5.6)
マネーサプライ(M ₁)* " (ポンド建M ₃)*	(10.3) (13.4)	(12.4) (9.7)	(14.4) (11.9)	(13.8) (10.4)	(13.3) (11.0)	(11.9) (9.2)	(10.6) (9.4)	(11.2) (9.7)
輸 出* (FOB、百万ポンド)	50,977 (7.6)	55,546 (9.0)	4,892 (6.4)	4,968 (8.8)	4,926 (12.2)	5,231 (10.0)	5,165 (10.5)	5,281 (7.9)
輸 入* (FOB、百万ポンド)	47,969 (3.9)	53,427 (11.4)	5,115 (12.3)	5,066 (16.1)	5,048 (17.4)	5,086 (14.7)	5,594 (25.0)	5,174 (18.3)
○貿易収支* (百万ポンド)	3,008 (1,185)	2,119 (3,008)	△ 223 (41)	△ 98 (202)	△ 122 (91)	△ 145 (323)	△ 429 (199)	107 (522)
○金・外貨準備高 (月末、百万ドル)	23,347 (27,476)	16,997 (23,347)	17,714 (17,703)	17,902 (18,299)	18,009 (18,113)	17,902 (18,299)	18,102 (18,493)	18,099 (18,006)

(注) 1. カッコ内は前年同期(月)比増減(△)率(%), ただし○印は前年同期実数。

2. *印は季節調整済み計数。Pは速報計数。

3. 四半期計数は、マネーサプライ、金・外貨準備高を除き月平均。

4. マネーサプライは、年・四半期計数が期末残高、月計数は月央残高。

5. 金・外貨準備高は、83年3月以降実勢相場による評価替えを実施したため、それ以前の計数とは連続しない。

%)。なお12月入り後長期金利はポンド相場の変動につれて多少上下する場面もみられたが、結局年末(同9.90%)には11月末とほぼ同水準で越年した。また、フィナンシャル・タイムズ株価指数は、企業収益の改善を背景に12月22日、776.2と既往ピークを記録した。

アジア諸国

◇ シンガポール

輸出好伸を背景に製造業生産が回復

最近のシンガポール経済をみると、製造業生産が対米輸出の好伸から83年7～9月期には1年半振りに前年比プラスに転じたほか、非製造業部門でも建設業が公共工事を中心に堅調を持続するなど引続き底固く推移しており、83年通年の実質経済成長率が、当初見通しの+4.0%から+7.2%(前年実績+6.3%)へと大幅に上方改訂されている(Lee Kuan Yew首相、84年年頭教書)。

まず製造業部門の生産動向をみるとオイル・リグ等は依然不振を余儀なくされているものの、石油精製業はインドネシア、マレーシアからの委託精製の減少分を中東からのスポット原油取り入れで補っているため一時的に減産を緩和。また電気

・電子機器等輸出関連業種(電気・電子機器生産前年比、83/1～3月 $\Delta 0.6\%$ →4～6月 $+5.1\%$ →7～9月 $+12.5\%$)やセメント等の業種でも逐次操業度が高まっていることから、製造業全体の生産水準は83年7～9月期に至り、1年半振りに前年水準を上回った(製造業生産同、83/1～3月 $\Delta 8.1\%$ →4～6月 $\Delta 1.9\%$ →7～9月 $+3.9\%$)。こうした状況下、製造業の投資マインドにも改善の兆しがみられる旨伝えられている。

また非製造業の業況も建設業を中心に好調を持続している。すなわち、民間住宅建設がなお高水準を維持しているうえ、公共投資も大規模地下鉄工事(総工費約24億ドル、工期83～87年)、Changi国際空港第2期工事(同約5億ドル、84～87年)の本格化等から引続き高水準に推移している。

この間物価動向をみると、卸売物価は輸入原燃料価格の鎮静から引続き前年水準を下回っており(前年比、83/1～3月 $\Delta 4.0\%$ →4～6月 $\Delta 4.2\%$ →7～9月 $\Delta 3.2\%$)、消費者物価も落ち着いた推移をたどっている(同、83/1～3月 $+0.5\%$ →4～6月 $+1.3\%$ →7～9月 $+1.2\%$)。

次に貿易動向をみると、輸出はエレクトロニクス製品をはじめとする機械類が伸びを高めており(機械輸出前年比、83/1～3月 $+18.5\%$ →4～6月 $+22.2\%$ →7～9月 $+58.2\%$)、輸出全体として

シンガポールの主要経済指標

(前年比・%)

		1981年	1982年	1983年				
				7～9月	10～12月	1～3月	4～6月	7～9月
実質 GDP		9.9	6.3	5.7	6.0	5.5	7.2	7.9
製造業生産		9.7	Δ 5.6	Δ 8.0	Δ 10.9	Δ 8.1	Δ 1.9	3.9
CPI		8.2	3.9	1.4	1.0	0.5	1.3	1.2
貿易	輸出 (前年比・%)	209.7 (8.2)	207.9 (Δ 0.9)	50.6 (Δ 3.9)	50.5 (Δ 6.1)	50.9 (Δ 0.9)	56.0 (1.2)	55.4 (9.4)
	輸入 (前年比・%)	275.7 (14.9)	281.7 (2.2)	69.2 (Δ 0.9)	68.6 (Δ 1.7)	68.7 (Δ 6.1)	73.0 (3.3)	69.9 (0.9)
(億米ドル)	貿易収支 (前年同期)	Δ 66.0 (Δ 46.3)	Δ 73.8 (Δ 66.0)	Δ 18.6 (Δ 17.2)	Δ 18.1 (Δ 16.0)	Δ 17.7 (Δ 21.7)	Δ 17.0 (Δ 15.3)	Δ 14.5 (Δ 18.6)
	外貨準備高(末残・億米ドル)	75.5	84.8	76.3	84.8	88.1	88.4	n. a.

も83年4～6月期以降前年水準を上回ってきている(輸出計同、83/1～3月 $\Delta 0.9\%$ →4～6月 $+1.2\%$ →7～9月 $+9.4\%$)。これを仕向先別にみると、日本、豪州向けは依然前年水準を下回っているものの、米国向けが一段と伸びを高めている(対米輸出同、83/1～3月 $+20.9\%$ →4～6月 $+45.4\%$ →7～9月 $+58.2\%$)ほか、西独、英国向けも着実に回復をみている。このため、輸入の落ち着き(輸入計同、83/1～3月 $\Delta 6.1\%$ →4～6月 $+3.3\%$ →7～9月 $+0.9\%$)とも相まって、貿易収支はやや改善を示している(貿易収支、83/4～6月 $\Delta 17.0$ 億ドル〈前年同期 $\Delta 15.3$ 億ドル〉→7～9月 $\Delta 14.5$ 億ドル〈同 $\Delta 18.6$ 億ドル〉)。

◇ フィリピン

緊縮策の強化に伴い景気はスローダウン

最近のフィリピン経済をみると、政情不安に伴う資本逃避から国際収支が大幅に悪化、外貨準備もほとんど底をついたため、政府は輸入抑制等緊縮姿勢を一段と強化している。この結果、部品供給を海外に依存する電機、自動車メーカー等では操短に追い込まれる例も見られ始めており、「83年10月以降経済成長は完全にストップ」(Virata首相、11月発言)、83年通年では $+0.5\%$ 程度の成長(Center for Research & Communication〈同

国民間シンクタンク)にとどまった模様で、さらに84年についてはマイナス成長を余儀なくされようとの見方が多い。

まず農業部門をみると、同国南部一帯を襲った干ばつ被害が拡大し、米、さとうきび等主要作物がかなりの減収を余儀なくされており、83年上期の農業生産は前年比 $\Delta 1.0\%$ と前年水準を下回った。

次に工業部門では、83年央にかけて対米輸出の好伸を主因に、電気・電子機械、衣料品、木材・木製品等の生産はおおむね順調に回復軌道を描いてきた。しかしながら、秋口以降、輸入抑制策の強化から原材料・中間財供給を海外に仰ぐ電機、自動車メーカーなどでは操業短縮、レイオフに追い込まれる例も出始めている旨伝えられている。

この間消費者物価をみると、83年6月の為替レート切下げや補助金削減に伴う石油製品の値上がりからジリ高傾向をたどっていたが、10月の大幅為替レート再切下げによって先行き2桁インフレへの逆戻りは必至の情勢にあり、同国国家経済開発庁でも「83年10月以降向う1年間のインフレ率は $+21\%$ ～ $+28\%$ になろう」とみて警戒を強めている。

一方対外面をみると、輸出は電気・電子機械、衣料品等工業製品が米国向けを中心に好伸をみた

フィリピンの主要経済指標

(前年比・%)

			1981年	1982年	1983年				
					7～9月	10～12月	1～3月	4～6月	7～9月
実 質 G N P			3.7	2.8	2.9		3.0		n. a.
C P I			13.3	11.0	12.0	7.5	5.8	6.6	8.6
貿 易	輸 出 (前年比・%)		56.6 ($\Delta 1.5$)	49.7 ($\Delta 12.1$)	11.8 ($\Delta 11.4$)	12.0 ($\Delta 9.1$)	11.6 ($\Delta 8.5$)	12.3 ($\Delta 7.4$)	13.3 ($\Delta 12.1$)
	輸 入 (前年比・%)		84.7 ($\Delta 2.1$)	82.7 ($\Delta 2.3$)	20.3 ($\Delta 8.8$)	19.5 ($\Delta 5.0$)	20.4 ($\Delta 3.7$)	20.8 ($\Delta 4.0$)	17.9 ($\Delta 5.0$)
(億米ドル)	貿易収支 (前年同期)		$\Delta 28.1$ ($\Delta 25.5$)	$\Delta 33.0$ ($\Delta 28.1$)	$\Delta 8.6$ ($\Delta 9.0$)	$\Delta 7.5$ ($\Delta 7.3$)	$\Delta 8.9$ ($\Delta 8.6$)	$\Delta 8.6$ ($\Delta 8.4$)	$\Delta 4.7$ ($\Delta 8.6$)
外貨準備高 (末残・億米ドル)			27.1	25.4	24.5	25.4	24.3	22.8	8.3*

*10月末 3.5

ほか、ココナツ油等一次産品の一部についても市況持直しを反映して増加に転じたことから、83年7～9月期にはようやく前年水準を上回るまでに回復した(輸出前年比、83/4～6月 $\Delta 7.4\%$ →7～9月 $+12.1\%$)。しかしながら、砂糖、バナナ等農産品が干ばつ被害の拡大から数量面で伸び悩んでいるうえ、昨秋以降は工業製品が輸入原材料の

手当難から減少に転ずるなど再び輸出収入の落込みが懸念されている。一方輸入は原油価格の低下や政府による輸入抑制策の堅持などから比較的落ち着いた動きを示していた(輸入同、83/4～6月 $\Delta 4.0\%$ →7～9月 $\Delta 5.0\%$)が、10月以降不要不急品の輸入制限等抑制スタンスを強化しているためさらに減少傾向が強まるものとみられている。